The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	数寄者高谷宗範の建築意匠について
Author(s)	桐浴, 邦夫
Citation	デザイン理論. 2017, 69, p. 54-55
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/65017
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

数寄者高谷宗範の建築意匠について

桐浴邦夫／京都建築専門学校

はじめに

明治以後の日本では西洋の建築技術の摂取に躍起になっていた。その中にあって武田五一は，茶室研究において千利休の茶室の持つ近代的性格に着目し，大正から昭和戦前の建築家たちは数寄屋建築の近代性に言及した論攷を発表していた。またフランク・ロイド・ライトら西洋の建築家たちは，早くから日本建築の持つ近代的性格を意識し，作品に活かすことを試みた。一方，藤井厚二は和風建築を科学的に分析し近代化することに取り組んだ。

高谷宗範は，職業は弁護士であるが数寄者として活躍した人物でもあり，素人ながら自邸や知人の邸宅や茶室の設計に携わっていた。いわゆるジェントルマンアーキテクトであったが，建築のこれからの姿を真摯に考究していた人物でもあった。近代における和風建築の意匠様式に関して深く思慮していたことが作品や言説において確認される。本発表は，その数寄者高谷宗範の建築意匠に対する考え方について，代表作松殿山荘の意匠を中心に考察するものである。

高谷宗範と建築設計

高谷宗範は嘉永４（1851）年，豊前中津に出生し，明治になって東京へ遊学し，のちに明治政府の官吏として主に法曹関係に奉職した。明治19（1886）年にはドイツに自費で洋行するが，その頃から茶道研究をはじめるようになった。明治26（1893）年には依願により免官され，大阪において弁護士業を営んだ。以後，茶の湯に傾倒し，嘉納治郎右衛門や芝川又右衛門，村山龍平ら関西の茶人と深く関わりをもった。

明治27（1894）年には大阪今橋の旧天王寺屋五兵衛宅を入手し，そこに住まいした。明治44（1911）年，昵懇にしていた芝川又右衛門が，西宮甲東園に武田五一設計になる洋館を建設するが，その茶室を宗範は設計する。大正２（1913）年の竣工である。同じ頃，神戸の嘉納治郎右衛門邸の茶室の設計も行う。丸や四角といった幾何学的な意匠が特徴で「□○（方円亭）」と名付けられ，同年の竣工である。その後も芝川氏の大阪の本宅から甲東園への茶室の移築とその改築，および甲東園の邸宅における新たな茶室の新築を宗範は手がけた。これらの竣工は大正９（1920）年である。

ちょうどそのころ，京都木幡に広大な敷地を購入し，山荘の建設をはじめるようになった。大正９年竣工の交差ヴォールト屋根をもつ九垓廬をかわきりに，その後の生涯をかけて取り組んだのが，この松殿山荘であった。

松殿山荘概要

松殿山荘はその広大な敷地に，建坪1000坪，17の茶室を持つもので，土地の高低を考え，百分の一の模型を作り設計を進めたと伝えられている。その意匠の基本は，方円の考えに基づくものといわれている。すなわち「心は円なるを要す，行いは正なるを要す」という考えである。また一方ではヴォールトの屋根や天井など，なにがしか西洋を感じさせる意匠，あるいは円や四角形など幾何学的な形態にカラフルな色彩を組み込み，近代造形運動

の意匠を想起させる建築でもある。建物の概要をまとめると表１のようになる。

表１　松殿山荘概要

竣　工	名　称	特　徴
Ｔ９	九垓廬	交差ヴォールト屋根
T15以前	聖賢堂	円形平面
T15以前	好古庵･文房室	左右対称の棚
T15	中書院 （中玄関）	丸四角の折上天井，ヴォールト屋根，カラフルな天井
Ｓ３	大書院	折上天井
Ｓ５	天五楼	移築
Ｓ５	楽只庵･不忘庵	移築
Ｓ５	蓮斎	カラフルな天井
Ｓ５	春秋亭	カラフルな天井
Ｓ５	樹松庵	移築
Ｓ５	仙霊学舎	ヴォールト天井
Ｓ５	講堂・事務所	
Ｓ９	美術館	高谷宗範没後

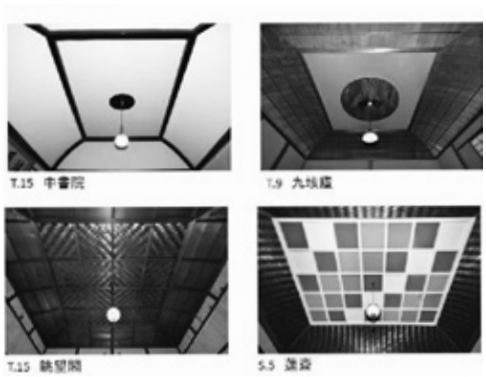

図１　松殿山荘の天井

芝川邸にみる高谷宗範の建築との関わり

武田五一の芝川邸洋館（1911）は，芝川氏の知人であった高谷宗範にも大いに刺激になったことであろう。洋館ではあるが，その内部意匠に網代天井や化粧屋根裏天井など，数寄屋建築にたびたびみられる意匠が応用されていた。宗範はこの和洋を組み合わせた建築から，大いに創作意欲がかき立てられたことと思われる。相前後し，宗範は芝川邸の和館の建築に関わる。茶室山舟亭・不老庵の新築，大阪にあった茶室松花堂写しの移築に携わる。そして洋館においても，二階の座敷の床の間付近は，宗範の関与が認められる。すなわち武田の設計図と違って，床の幅が広くなっていること，松殿山荘仙霊学舎にも使用されているものと同じ檳榔樹の床柱が立てられている，ことなどである。

また芝川家の資料を多く所蔵する千島土地株式会社には，茶室の新築や移築時における大工の出面帳や材料の仕入れに関する書類があり，図面も残されている。これらから，高谷宗範自身が図面を引き，職人や材料の管理までも行っていたことを知ることができる。如何に建築に執着していたかが理解される。

おわりに

昭和２（1927）年，京都帝室博物館において高谷宗範は「茶室と庭園」と題した講演を行う。そこで宗範は当時の建築学の最新の内容にまで言及している。とりわけ様式の問題についての部分では，大正時代は「秩序混乱の時期」とし，「目下試験中の過渡期」であると述べている。そして日本建築は気候風土生活習慣によるもの，と主張する。これらの展開は当時の建築学の問題に精通していることが理解され，とりわけ藤井厚二の主張と非常に似通った側面があることが認められる。武田や藤井との関わりは現在のところ明確ではないが，彼らの存在が宗範に大きな刺激を与えたことは間違いない。

そのようにみたとき，宗範の特異な意匠は当時の建築様式の問題を素人ながら深く考慮した結果であった，ということが読み取れる。その視点でみれば松殿山荘は，数寄屋建築の今後のあるべき姿を探求した壮大な実験建築であった，ということができる。